

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5575号

1月号

平成26年 12月 25日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

### 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【概要】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。向こう1か月の降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 12月27日(土)～ 1月2日(金)

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 1月3日(土)～ 1月9日(金)

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 1月10日(土)～ 1月23日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆ 早期水稲

---

#### 1 種子の選別と消毒

種子は枝梗をよく取り除き塩水選を行い、その後水で洗い流します。

種子消毒は、袋に余裕を持たせ薬液が籾袋全体に十分付着するようにします。籾に気泡が付いていると効果が低下するので、揺すって気泡をよく抜きます。薬液の水温が10度以下では効果が劣る場合もあるので、薬剤毎の温度や時間を守り、行います。また、育苗箱等の資材も消毒します。

#### 2 浸種と催芽

浸種の水量は種子籾の二倍以上とし、期間は水温が10度の場合は10日間、15度の場合は7日間程度と十分行います。水の交換は薬剤効果を安定させるため3日目以降から行います。種子籾袋の数が多い時は時々位置を入れ替え、温度が均等にかかるようにします。十分に浸種してくると籾の胚の部分が白く見えるようになります。

浸種後は一昼夜程30度～32度で、芽が1<sup>ミ</sup>程度伸びた状態まで催芽します。

### ◆ ムギ類

---

麦踏みは耐寒と耐干性を高め、分げつの増加や稈の伸びすぎを抑える効果があります。節間が伸び始める2月中旬までに2～3回実施します。霜や露がある時や茎の水分が高いときに行うと、茎葉の損傷が大きいので、土壌や株の水分が低い乾燥した時がよいでしょう。分げつ肥は1月中旬に窒素成分で10<sup>ア</sup>当たり2.5<sup>キ</sup>程行い、条播きの場合は土入れします。

(鎌田 博人)

## 施設野菜

### ◆ 共通事項

---

午前中はハウス内の温度を十分確保し光合成を促進させ、午後からも急激に温度を下げないように換気には特に注意します。厳寒期には夜間暖房機の設定温度より最低温度が低くなるので、翌朝冷え込みが強いと予想される場合には、暖房機の設定温度を普段より高めに設定し、実最低温度を維持します。

かん水は、地温低下を防ぐため、晴天時の午前中の早い時間帯に行うようにし、液肥での追肥は硝酸態窒素主体のものを 사용합니다。

### ◆ きゅうり

---

①摘心栽培：草勢が低下すると不良果が発生するので早めに摘果を行います。また、採光・通風を良くするために、生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所を整理します。追肥は月に10㎡当たり窒素成分で5～6kgかん水時に施用します。

②つる下ろし栽培：日照、低温等の影響による「心止まり」が発生しやすい時期です。生長点の状態を確認しながら、草勢が弱い場合には3節に1果程度を摘果し、着果負担を軽減します。また、過度の摘葉は草勢低下を助長するため、収穫節位から下5～6枚は葉を残します。追肥は摘心栽培と同じです。

### ◆ ピーマン

---

促成栽培は、着果量が多いと草勢が低下しやすくなるので、かん水多め、夜温を普段より高めに管理し果実の肥大を早めます。また、追肥遅れに注意し、2月までは月に10㎡当たり窒素成分で3～4kg施用します。

### ◆ トマト

---

特に光を必要とする作物なので内張ビニルを十分開け光の確保に努めます。果実肥大、着色促進、食味向上のためには、15～18枚の葉が必要で、過度の摘葉は避けます。

### ◆ いちご

---

食味低下や小玉果となりやすいため、午前中は28～25度を目安とし、開花から45日程度で収穫するように管理します。また、1果房当たり10果前後に摘果します。

液肥主体で、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを追肥しますが、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。

(黒木正晶)

## 葉茎根菜類・いも類

ハウスやトンネルによる半促成栽培の播種期及び早熟栽培の定植期となります。支柱立てやビニール被覆など植え付け準備を計画的に進め、適期に植付け、は種ができるようにします。

### ◆ スイートコーン

---

ハウス、ミニハウスは中旬から、大型トンネルは下旬からは種適期となります。地温が低いと発芽率が低下するので、地温を高目に保持することが重要となります。は種1週間前までには、トンネル被覆を行い地温を確保してください。なお、早播きしすぎると、地温不足による発芽不良を起こしたり、稈が伸びすぎてトンネルを除く時期より前に、葉や雄穂がビニールに接触し、先端不稔等の品質低下を招きますので、播種期を守りましょう。来月播種する小型トンネル栽培の準備も始めましょう。

### ◆ 食用かんしょ

---

小型トンネル栽培の育苗～定植期です。換気に注意してください。1月中旬以前の早植えは地温が十分に確保できずに肥大根の着生や伸長が悪く、丸いもになりやすくなります。定植時期は地温確保が可能になる1月末以降とし、定植の1週間前にはトンネル被覆を行い、十分に地温を確保して定植します。

### ◆ ばれいしょ

---

春作は下旬より不織布被覆栽培の植付け期となります。ばれいしょは植物防疫法の指定種苗となっていますので植物防疫検査印のある健全な種芋を用いましょう。種芋は30g程度の大きさのものが適していますが、芋が大きい場合には、切り割りして植付けてください。

### ◆ ごぼう

---

9月から10月にかけて播種した水田ごぼうが収穫期に入ります。収穫開始時期の目安は、トンネル栽培のものは播種後100日、マルチ栽培は130日くらいです。

(河野 健次郎)

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆ 完熟きんかん

1月中旬から、完熟きんかんの出荷が始まります。今年は、す上がりが少なかつたため果実肥大は良好でしたが、酸含量が高い可能性があります。食味を確認しながら収穫しましょう。収穫が始まったら、過熟やうるみ果を防ぐために、昼温は15度を目安に管理します。また、裂皮を防止するために、早朝の換気等により、施設内の湿度を低く維持しましょう。完熟果実は打ち身や圧迫による傷害を受けやすいので、収穫カゴ周囲の緩衝材設置や果実の過度の積み重ねを避け、取り扱いには十分注意しましょう。

### ◆ マンゴー

今年は、萌芽のぼらつきや弱い花芽の発生が見られます。このような園では、結果不良やミニマンゴーの発生が予想されますので、花芽が見え始めたら早い段階からかん水を行い、芽が動きやすい環境を確保しましょう。また、昇温の過程を例年よりも慎重に行い、じっくりと花芽を作りましょう。萌芽のぼらつきから、開花期間が長くなり、適期防除ができないことも予想されます。開花前の予防的防除を徹底しましょう。

## 2 果樹全般

---

多くの果樹で、初期収量を確保するために、計画密植栽培が行われています。枝が隣の樹とふれはじめたら、縮伐や間伐を実施しましょう。

剪定においては、主枝、亜主枝の配置を考えた剪定が重要です。また近年、多くの果樹で、着花不良や結果不良が見られます。健全な樹勢を維持し、適正な結果枝や結果母枝を確保するように、間引き剪定と切り返し剪定を組み合わせで行いましょう。

(山口 和典)

# 花き

### ◆ 電照ギク

---

1～2月に消灯する作型は花芽分化時期が1年中で最も低温期になりますので、夜温を十分に確保できるように暖房機の設定温度や停電・事故には十分に気を配って下さい。電照期間中に低温に遭遇した場合は、消灯1～2週

間前から夜温15度で予備加温を行ってください。低温開花性系統の場合、消灯後は18時から1時までは15度、1時以降は12度の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。また、再電照時期の決定は必ず検鏡してから決定するようにしてください。低温期はハウス内の湿度も高まりやすいので白さび病が多発します。十分な換気を行うとともに、予防ならびに適期防除を心がけましょう。

#### ◆ スイートピー

---

12月から気温も下がり、日照時間も確保できていますが、予報を確認しながら、気象条件に合わせた草勢コントロールを行いましょ。窒素肥料を追肥する場合、地温の低下するこの時期は、硝酸態窒素主体の液肥が効果的です。

#### ◆ デルフィニウム

---

沿海地域のエラータム系は2番花以降の花穂が急速に抽だい・伸長しますので、採光を良くして硬さとボリュームを確保してください。

#### ◆ ホオズキ

---

早い産地では下旬から植え付けが始まります。土壌消毒にあたっては事前にビニルフィルム等でべたがけを行い、地温を上げておきましょう。また、健全な地下茎を使用し、本ぼへの病気等の持ち込みを防ぎましょう。

#### ◆ ラナンキュラス

---

日中は採光のため内張ビニルの開閉をしっかり行いましょう。日中は10度を下回るような極端な低温管理ではなく、生育適温での管理を行いましょ。収穫が続くと草勢が低下しやすくなりますので、定期的に液肥を施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょ。

(中村 広)

### 畜産

#### ◆ 家畜防疫対策

---

12月16日に延岡市の養鶏場において、4年ぶりに高病原性鳥インフルエンザが発生しました。また、11月下旬から、鹿児島県出水市を始め、全国各地で野鳥での高病原性鳥インフルエンザの発生が続発しており、国内の

どの農場で発生するかわからない厳しい状況に置かれています。野鳥はウイルスを持っているという認識を持ち、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の再徹底を図りましょう。また、これまで行ってきた消毒の徹底や侵入防止対策とともに、温湿度環境等、飼養環境の改善に努め、鶏にできるだけストレスがかからない管理を行いましょう。なお、万が一、家畜・家禽に異常がみられた場合は最寄りの家畜保健衛生所に直ちに通報を行ってください。

豚では、南九州でPEDの再発生がみられています。PEDワクチンの使用とともに、手洗いや消毒の徹底、豚舎の作業動線の見直し等、通常の疾病も含めた衛生管理の再点検を行いましょう。

## ◆ 家畜

---

今月は、年間で最も寒く乾燥する時期であると同時に畜舎内を閉め切るため、舎内が換気不足になる時期でもあります。昼間はカーテンを開けて十分に換気し、舎内環境の改善を図りましょう。また、哺乳子牛等の幼畜において、隙間風や床の湿りは肺炎や下痢の原因となるので、赤外線ヒーター等の使用とともに、風よけや床材の入れ替え等、十分な寒冷対策を行いましょう。なお、投光器の保温効果は低いので、他の効果の高い機材を使用し、温湿度計も設置して畜舎環境の確認を行いましょう。

(三角 久志)

## 特用作物

### ◆ 茶

---

#### 1 寒さ対策

寒風や急激な低温により、幼木園や中切り園では、成葉の寒害や幹割れ（裂傷型凍害）等の凍寒害の発生が懸念されます。被害を受けやすい茶園では、防風ネットの設置等による対策を実施してください。また、山間地では積雪による枝折れや裂傷防止対策が必要です。

#### 2 定植ほ場の植え付け準備

降雨の少ない今月は、定植の準備を行う最終時期です。

茶は定植後、摘採するまで4～5年かかることから、一度植え付けると植え替えが難しい作物です。新植に当たっては地域の気象や茶樹の特性を理解した上で、品種やほ場を選定しましょう。

茶樹は湿害に弱いため、茶園の土壌は排水が良く耕土の深いことが求められます。地下水位が高く、湧水が懸念されるほ場への定植は極力避けましょう。粘質土壌で水はけが悪いほ場、水が流入するようなところは事前の対策が必要です。深耕による混層や明渠、暗渠等の対策を講じます。

また、アルカリ性の土壌や改植茶園では、土壌pHの調整やたい肥施用により地力増強を図り、土壌線虫の被害が懸念されるほ場では、早めに土壌消毒を実施して定植するように心掛けてください。

### 3 チャトゲコナジラミの発生の確認

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の葉の裏に寄生して越冬しますので、茶の葉の裏を確認し、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

(佐藤邦彦)

## ◆ しいたけ

---

### 1 植菌と仮伏せ

植菌作業はできるだけ早めに行い、植菌後の原木は、菌糸の活着を促進するため「仮伏せ」を行います。原木を地際から40㌢以下の高さに横積みして笠木や遮光ネット等で被覆し、保温と保湿を図りましょう。

### 2 寒子づくり

寒子は厳寒期に採取される1年のうちで最も品質の良いしいたけです。肉厚のしいたけ生産が可能ですが、防風垣の設置などほだ場の湿度の保持や、袋かけやビニール被覆による保温・保湿に努め、しいたけの成長を促す必要があります。また、散水を行う場合は、採取予定日の一週間前にはやめて、日和子での採取を心がけるとともに、しいたけが凍結しないよう散水時間等にも注意しましょう。

### 3 採取

発生したしいたけは、目標とする品柄に応じ、若干早めに採取しましょう。

(小田 三保)

## ◆ たばこ

---

27年作は、基本耕作技術を忠実に実行し、気象に左右されにくい『力強い葉たばこ』づくりを目指し、品質・収量安定化に向けて取り組んでいきま



しょう。

今月は、本畑準備等が主な作業となります。

1 前作物等の関係で、たばこ予定ほ地の準備が遅れないように計画的な本畑準備作業を行いましょう。

2 肥料設計は土壌検定結果及び前作物調査を参考にして行いましょう。

3 堆肥は良質完熟堆肥を施用し、散布はすじまき散布を行いましょう。また、大柄晩作化、グレー葉生出防止の為に未熟堆肥投入は避けましょう。

4 ねり畦防止の為、施肥畦立は、土壌水分が60%程度（土を手で握って広げ、できた塊を指で押した時、2～3個に割れる状態）を目安に、移植1ヶ月前までに実施しましょう。また、併せて溝掘機等を使い排水溝を完備しましょう。

5 肥土消毒や土壌消毒を行う際には、農薬使用基準に則って実施しましょう。

(井上 馨)

## 農薬の短期暴露評価の導入について

### ◆ はじめに

---

農薬は、「農薬取締法」に基づき一部の例外を除いて国に登録した農薬だけが製造、輸入及び販売できる仕組みとなっています。農薬の登録に当たっては、病虫害・雑草などへの防除効果のほか、作物や環境への残留農薬が人の健康に害を及ぼすことがないように、安全性に関して厳重に審査されています。

### ◆ 農薬の短期暴露評価の導入と使用方法の変更について

---

農薬の人に対する安全性の評価はこれまで、一生涯にわたって様々な食品を介して農薬を摂取しても、影響を生じないかどうかの観点だけから実施されてきました。（長期的暴露評価）この長期的暴露評価に加えて、最も残留しやすい条件で農薬を使用した農産物を、一度に多量に摂取した場合の影響を評価する短期暴露評価が新たに導入されることになりました。この短期暴露評価の結果、農薬によっては使用方法の変更及び残留基準値の見直しが行われます。仮に農薬の変更登録や変更後の使用方法の周知が行きわたる前に、新しい残留基準値が施行されると、農薬容器のラベルに書いてある変更前の方法で使用されたことが原因で、農産物の残留基準値が超過する可能性があります。このため、短期暴露評価により農薬の使用方法を変更する必要があります。

生じた場合は、農薬メーカーから農薬の販売者や使用者に対して、チラシ等により情報提供が行われるとともに、変更後の使用方法に基づいて農薬を使用するように注意喚起が行われます。そのような農薬は、農薬容器のラベルではなく、示された新しい使用方法に従う必要があります。

#### ◆ 短期暴露評価により使用方法が変更になる農薬について

平成26年12月18日現在で、使用方法の変更が必要な農薬は以下の通りです。

①アセフェート（オルトラン粒剤・水和剤、ジェイエース粒剤・水和剤など）

②カルボスルファン（ガゼット粒剤、アドバンテージ粒剤など）

③ベンフラカルブ（オンコル粒剤5、オンコルスタークル粒剤、ジャッジ箱粒剤など） 該当する農薬をお持ちの場合は、最新の登録情報を農薬メーカー、農薬販売店、JA、農業改良普及センター、インターネット等で確認して使用するようにしましょう。また、今後もこのような変更が行われる農薬は逐次追加されることがありますので、最新の情報に注意してください。

（食の消費・安全推進室 環境保全農業担当）

#### 内容の詳細について

1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害全般	—	コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスを多重・多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病 菌核病 つる枯病	並 やや少 やや少 並 並 並	うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は高温、多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナキイロアザミウマ	前年・前々 年より多い やや少	感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改 植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は20日間以上蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合は、後作きゅうりの定植後直ちに予防散布し感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 菌核病 黒枯病	並 並 並 並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。また、罹病葉は重要な感染源となるので適宜除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	ミナキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ	やや少 やや多	この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、最少でも7日間隔で3回の連続防除を行い、多発しているときはさらに追加防除を行います。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 うどんこ病 すすかび病	並 並 並 前年・前々 年より多い	すすかび病の発生が多くなっています。 灰色かび病の発生は並ですが、例年1月からの発生が多くなる傾向があるため低温多湿にならないよう日中の換気、夜間の保温に努めます。また、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努めます。 トマト黄化葉巻病の発病株は、必ず株全体を除去し、土中に埋めるかビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	カコナジラミ類	並	
冬春いちご	うどんこ病 ※ 炭疽病	やや多 やや少	うどんこ病の発生が多く、注意報を発表しています。多発すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおきます。 一方、炭疽病の発病した株は、早期に除去し新たな感染を防止します。
	ハダニ類 ※ アブラムシ類	多 並	先月から引き続きハダニ類の発生が多く、注意報を発表しています。寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。また、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群が確認されているので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。

- 1) ※は注意報を発表しています。  
 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。  
 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

(病害虫防除・肥料検査センター)